

*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



—チェルノブイリに思いをよせて—

ポレーシェ

～南相馬 菜の花プロジェクト～

コンバインキャンペーン始まる！

福島県南相馬市で始まった「なたね栽培」は、今秋のなたね播種を無事終え、栽培総面積は12町1反(約12ヘクタール)となりました。播種を終えた今、来年6～7月の収穫がいよいよ課題となっています。なたねは収穫のタイミングが難しく「こぼれ種を少なくすること」が課題です。播種した畑が8か所に分散し、短期間に12町1反の面積に対応した収穫を行うには、相應のコンバインが必要となってきます。



<コンバインでなたねを収穫
(イメージ写真)>

そのため私たち「救援・中部」は、コンバインを購入するため、10月から「南相馬コンバインキャンペーン」を開始しました。早速、大きな反響があり、菜の花プロジェクトに手応えを感じています。コンバインは高価であり、今後責任ある栽培体制が求められるところから、播種した各グループ・個人が集まり、11月12日に南相馬で「菜の花会議」を開催しました。会議では、今後助成金の申請や行政との交渉などが必要になることから、栽培主体の組織化が検討されました。その結果、当面「南相馬農地再生協議会」(仮称)として活動し、将来的にこの組織を法人化することが話し合われました。

南相馬でのこのような動きを見ながら、具体的にコンバインを手に入れるべく、コンバイン探しが始まっています。長野県伊那市では、「中古のコンバインが200万円台で手に入る」という話があり、実際に操作することになる南相馬の杉内さんや、奥村さんに伊那市までご足労いただき、コンバインの状態をみてもらいました。農業機械メーカーの中央研究所にも足を運び、機械の選定にあたっての性能・価格・操作性・在庫情報などの調査も進めています。助成金申請や機種選定など、しばらくは悩みの日々が続きます。皆様のご支援を切にお願いいたします。(原 富男)

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター B1

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部 (店番号150)

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-732-7172 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>



チェルノブイリ救援中部

南相馬便り

☆第6期南相馬市、第2期浪江町放射線量率マップ作成の測定作業

10月19.20.26.27日と、4日間にわたり実施しました。19日は秋晴れ、20日は小雨、26日は台風が心配されましたが小雨、27日は秋晴れの中で、ボランティア(述べ43名)と地元の協力者(述べ40名)のお蔭で、無事終了しました。11月末には印刷が仕上がり、南相馬市と浪江町で発表します。

11月10日には、会津坂下町「会津の大地と健康を考える会」の要請を受け、とどけ鳥事務所から4名と地元ボランティア約30名の方々とで、測定活動を実施しました。初めての測定作業でしたが、小雨にも拘らず順調に進み15時前には終了しました。12月20日頃に印刷が仕上がる予定です。他の2町の参加者から、「自分たちの町でも測定し可視化したいが、協力願えるか?」の問い合わせもあり、マップ作りが広がる可能性を感じました。

☆とどけ鳥事務所の現状 前号で検体数減少傾向と報告しましたが、9・10月は合計800検体(昨年比120%増)、カンパ金は合計338,831円(昨年比232%増)でした。検体測定に追われる中、被災地視察案内、とどけ鳥見学、取材の要請も多くあり、てんてこ舞いの2ヶ月でした。検体測定では、きのこ類も多く持込まれましたが、南相馬市内・飯館村内始め、県内産は全て100Bq/kgを大きく超え、一切食べる事はできませんでした。また、昨年より多く、試験田で栽培した米を測定した結果、太田川水系の米の汚染度が高い事が判明しました。この結果を持って、市担当部局との会合で市の資料と突合せた所、市の結果でも太田川水系と新田川水系の米の汚染度が高く、両者の結果が合致しました。両水系以外の地区での試験栽培の結果は、ほとんどが「比較的低い汚染」か「不検出」です。この両水系の上流にはダムがあり、その水を農業用水に利用しています。今年度太田地区で稲作の実証実験をした新潟大学とともに、今後両水系の調査を行っていき、原因を追究することとなりました。

☆南相馬市の現状 市の発表(9/26)によると、市内居住者は51,188人で、そのうち、他市町村からの仮居住者は1,929名です。実質、南相馬市民の居住者は約49,200名強です。震災前人口は71,000名でしたから、震災時の津波被害死亡636名 災害関連死436名(10/2市発表)、震災後の人口減 約6,000名を差し引くと、15,000名弱の方々は今現在も市外に避難していることが伺われます。また長引く避難生活で、要介護・要支援の市民が、震災直前の2,761名から8月末現在で3,498名(127%)と増加傾向にあります。病院や医院等の復旧も、思うようには進んでいません。小高区は警戒区域解除になり1年7ヵ月経ちますが、今だに住めない状況に加え、20km圏外の病院や医院も、医師・看護師等の不足で休止や病床減を余儀なくされています。(神谷)

病院の状況(10月1日現在)

	震災前	震災後			現稼働数	
		新・増設	休止	廃止		
病院数	8	—	2	—	6	
病床数	一般	695	40	385	—	350
	療養	276	—	123	40	113
	精神	358	—	298	—	60
	合計	1,329	40	806	40	523

新増設・廃止は鹿島厚生病院が療養40床を、一般40床に転換したものです。

医院の施設数(10月1日現在)

	震災前	震災後		現稼働数
		新設	休止	
小高区	7	—	7	0
原町区	29	1	6	24
鹿島区	3	1	1	3
合計	39	2	14	27

歯科医院の施設数(10月1日現在)

	震災前	震災後		現稼働数
		新設	休止	
小高区	5	—	5	0
原町区	23	—	4	19
鹿島区	5	—	1	4
合計	33	—	10	23

「シーベルト測定隊」に参加して (三井物産東北支社 阿部良子)

仙台から高速道で南下、亘理、山元町付近に入ると、たくさんの葎ハウスが目飛び込んでくる。農地、宅地も大分復興が進んでいる。南相馬市原町区も同様、通常の生活と何も変わりがなく、車と人が行き交う町だった。内心ホッとした。

1 日目は、地元に住む看護師さんとペアを組み、「相馬野馬追」で有名な雲雀が原、相馬中村神社周辺を測定。数値に変化は見られなかったが、看護師さんの言葉には重い感情が込められていた。「原発事故後、原町区でも避難指示が出されたが、事情があって家に残る事を選択した。屋内待機の人も含め、町から人も車も消え、電気も点かず、あれ程不気味な思いをした事はなかった。今でも、洗濯物は外に干す気にはなれない。そしてあの時の政府・国の対応に振り回され、逃げ惑った経験者は、もう大丈夫と言われても到底信用できない」と怒りを込めて語った言葉が、深く胸に刺さった。

夜の懇親会では、「家に帰りたい」「除染が終わり戻れるまで待つ」「いや、遅々として進まない状況では、住めるようにするから戻って来てと言われても将来設計がたたない」「別の地へ移転するよう、国の責任のもと、しっかりとした補償をすべし」といった議論が交され、部外者の私は何一つ口を挟めず、息をのんで見守るしかなかった。

小高地区や浪江町の海岸沿いの、二年半前と変わらない津波の跡、シャッターを閉じたままの商店、潰れた木造家屋、誰も居ない町並み、あの日から時間が止まったままの現実がここにはあった。フクシマは決して終息してはいない、自分の目で心で確認した二日間だった。

「とどけ鳥」に想いを寄せて… (森田)

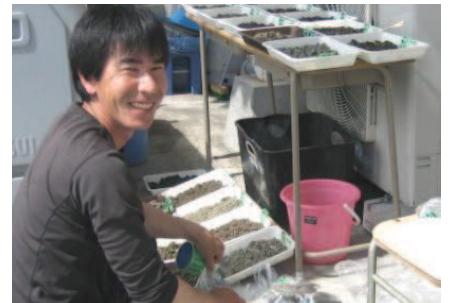
測定センターのみなさま、お元気ですか？ M 田です。いま故郷の愛知県にいます。10 月まで約 1 年半の間お邪魔していた南相馬。「とどけ鳥」のブログを、こっちで見えています。

相変わらず忙しそうなお測定センター。肌で感じるのですが、距離は遠いです。また寒い冬を迎える南相馬。私事でとどまることのできなくなったことに、申し訳なささと寂しさを感じています。南相馬では、最初、ガレキ撤去のボランティアをしていましたが、「放射線量率マップ」をきっかけに「とどけ鳥」と出会い、いつしか活動は「とどけ鳥」中心になりました。他のボランティアではできない体験をたくさんしました。

測定センターでは、川の放射能調査や菜の花活動、「だげんちょプロジェクト」など。なかでもこだわったのはブログです。いつも、愛知の人を思い浮かべて書いていました。「県外の人に伝える！」…それが県外から来た私の役目の 1 つだと思ったからです。だから、なるべく測定センターで聞いた地元の人を、何が起きているかを載せました。M くんや K くんのお話を続けることが、南相馬の復興につながると感じていました。名古屋から毎週通う神谷さんを除いて、9 名の測定ボランティアすべてが地元の人。でも、地元でない人やいろんな人が関わったほうが、いい活動だと思います。南相馬には、県外からたくさんのボランティアが来ます。もし南相馬にボランティアに行くなら、1 日でも、できたら長く、できたら定期的に、測定ボランティアとして参加してほしいと願っています。「とどけ鳥」は、南相馬の現状が最も分かる場所の 1 つです。

地元で手をあげた測定ボランティアの人はスゴイと思います。日々の測定では、気がめいるような忙しさ、作業、測定結果が続くときもあるかもしれませんが。それでも「とどけ鳥」は、南相馬にはなくてはならない活動です。すばらしい活動です。

測定ボランティアのみなさん、どうかお元気で！ いつも遠くから見守っています。…というか、私は今も測定センター「とどけ鳥」のメンバーのつもりです(…ダメ?)。だからこれからもよろしくお願ひします。



＜土壌サンプル乾燥作業中の
森田さん(2013.06/14)＞

「友情のクリスマス」…クリスマスをともに!!



<名古屋の事務所で会議をしました。㊤
(2012.2月9日)>

(チェルノブイリの人質たち基金理事 ドンチェヴァ)
まだ夏のうちに、「チェルノブイリの人質たち」基金は、日本からの手紙を受け取りました。

南相馬市の青葉幼稚園の園長先生から、ジトーミル市第12番学校の生徒たちに心からの感謝を伝える手紙でした。彼らは、青葉幼稚園の園児たちに、福島第一原発事故で被災した子ども達への励ましのしるしとして、絵画を贈ったのでした。

「遠い日本まで、私たちの絵が子ども達の心に喜びをもたらすことができたのは、とてもうれしいです。」と I.M.カルポヴァ先生は語りました。

「1991年、最初のクリスマス・カードが心のこもった支援の言葉を添えて届いた時、日本は私たちを励ましてくれました。保護者も見ることができるよう、そのカードで私たちは学校の教室を飾りました。時が経って、ウクライナの子ども達は日本の子たちに、同じようなプレゼントをしようと提案したのです。」

過去 27 年間、日本の方々是我们的ジトーミル州を支え続けてくれました。力を合わせて、私たちはチェルノブイリ事故の影響を克服する努力をしてきました。医療機器・医薬品・カレンダー・粉ミルク・衣類やおもちゃまで——これらすべてが、私たちの原子力の悲劇に心を痛めた、思いやりにあふれる日本人たちから届けられました。

2011年、日本自身が福島第一原発事故の後に大惨事を体験した時、私たちはジトーミル州民に共同のキャンペーンを行うことを提案しました。慈善基金「チェルノブイリの人質たち」と「ウクライナ子ども基金(ジトーミル州支部)」のイニシアティブで、「友情のクリスマス」というキャンペーンが発表されました。学校の生徒たちに、日本の子ども達に宛ててクリスマス・カードを書いてもらい、それを私たちが日本の被災地に送ろうと、私たちの基金は州内の学校に呼びかけをしました。

近年なかったことですが、私たちは小児病院の患児たちにも参加してもらえよう、州保健局にも別途依頼書を書いて呼びかけました。



<南相馬市「とどけ鳥」に届いた
ウクライナからのカード (2013.6月) >



<ナロジチおひさま幼稚園に届いていた
日本からのカード (2013.9月) >

すでに、最初の絵画が私たちの基金宛に届いています。そしてその一つが、「自分の翼で子ども達を災いと不幸から防ぎ、子どもの無事を守っている天使の絵」だったのは、とても象徴的なことかもしれません。

人生は、私たちを諭し、考えるべき多くの課題を与えました。未来に何が起ってはいらないのか、来たるべき世代のために何を守らなければいけないのか……。ですから大人である私たちは、私たちのキャンペーンが子ども達の“人間愛と善良さを培うよすが”となるとともに、ウクライナと日本の両国民の友情の絆を強めることを確信しています。

クリスマス・カード・キャンペーン（諏訪 ひかり）

初めまして。今回カードキャンペーンの担当になりました、N たま研修生の諏訪です。大学に通いながらのインターンは、だらだらと過ごしていた前期と比べて程よい忙しさを与え（笑）、忙しさ以上にプラスになる経験をさせてくれます。本当に感謝です。

さて、カードキャンペーンの進捗状況を報告します。先月行われたワールドコラボでは、台風の影響もあり、1 日だけの出展だったのにもかかわらず、たくさんの方に協力をしていただけました！ 事務所に集まったカードは、**698 枚**になりました（11 月 22 日現在）！

カード以外にも、折り紙がたくさん事務所に届いています！ ご協力くださり、ありがとうございます。心のこもったカードを眺めていると、とてもほっこりした気持ちになります。毎年行われているキャンペーンに関わることができること、多くの方の思いやりを一番感じられる立場にいることを、今、とても嬉しく思っています。「きっと、カードを受け取るウクライナや福島の子も達は、もっともっと嬉しい気持ちになるんだろうな〜」と、感じました。

今後の活動予定としましては、毎年ご協力いただいている三井物産株式会社（11 月 26 日）、山里学童（11 月 28 日）にお邪魔し、カードキャンペーンのアピールとカード作りを行う予定です！

目の前のことにとらわれず、もっとたくさんの方の思いやりを感じたいです（笑）。

締切りは 12 月 10 日（火）です。まだまだ間に合います。皆様のカードをお待ちしています！

ワールド・コラボ・フェスタ2013出展（兼松 真梨子）

10 月 27 日（日）、栄のオアシス 21 銀河の広場にて開催された「ワールド・コラボ・フェスタ 2013」に、ブース出展しました。NGO ブースは例年、久屋大通公園のもちのき広場にて行っていましたが、今年は台風の影響で 26 日（土）は開催中止となり、27 日も会場を変更して行う事となりました。心配された台風は去り、すっかり天気は回復。大勢の来場者もあり、賑わいをみせていました。急遽会場が変更されたため、**本来のブーススペースの半分という狭さ（長机ひとつ分しかない！）**で、カード作りをしてウクライナグッズを販売し、さらには相馬の梨を売るという強行。梨の販売にも、実は一悶着あったのです…。会場変更にもなって「オアシス 21 では梨は売れない」と聞いていた私たち。残念だけど、梨は内輪で買って食べようと思っていたところ、他のブースで巨大な料理用バナナを売っているのを発見！！「え、売っているの？」これは見逃せない！ **実行委員会へ直談判**するという、山盛さんの機転で販売することができました。

そんなこんなで、カード作りでは人が絶えることなく、小さい子どもから年配の方まで参加してくださいました。なかには、オーストラリアからの旅行中でたまたま立ち寄ったというご夫婦も。つたない英語で、なんとかキャンペーンや我々の活動を説明し（はたして正しく伝わったのだろうか…）、カード作りにも参加してもらいました。

この日集まったカードは 104 枚！ パチパチパチ！！ ウクライナグッズも売れ行き好調。そして相馬の梨「新高」は準備した **37 個全て完売しました！** 逆境に強いチェル救なのでした。この日の売上げといただいたカンパは、支援活動に使わせていただきます。ご協力いただきました皆様、本当にありがとうございました。また、当日運営のボランティアにお越しく下さいました皆様にもお礼を申し上げます。ありがとうございました。



<タイ・カンボジアのスタッフにてⒸ(2012 年 2 月)>

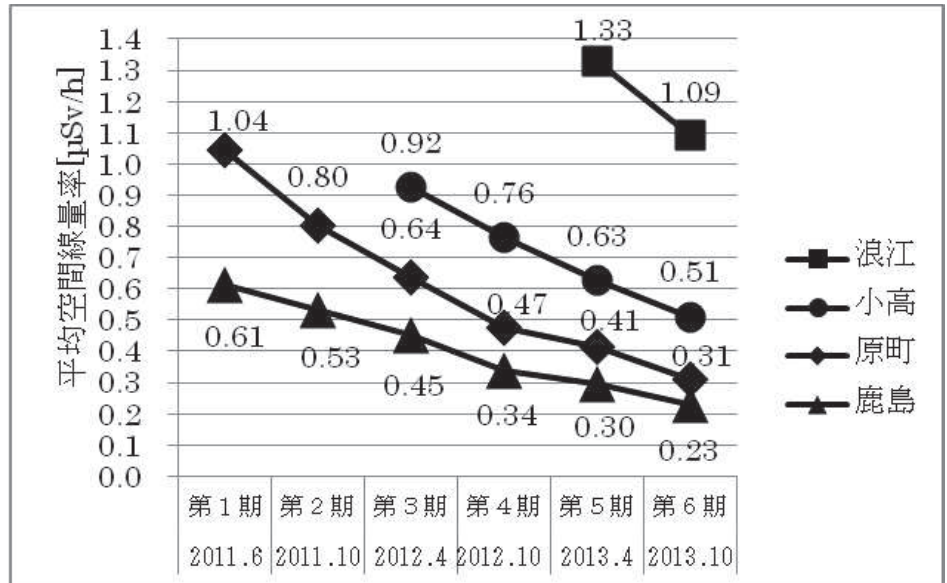


第6期(第12次・13次)空間線量率 測定結果 <速報>

(池田 光司)

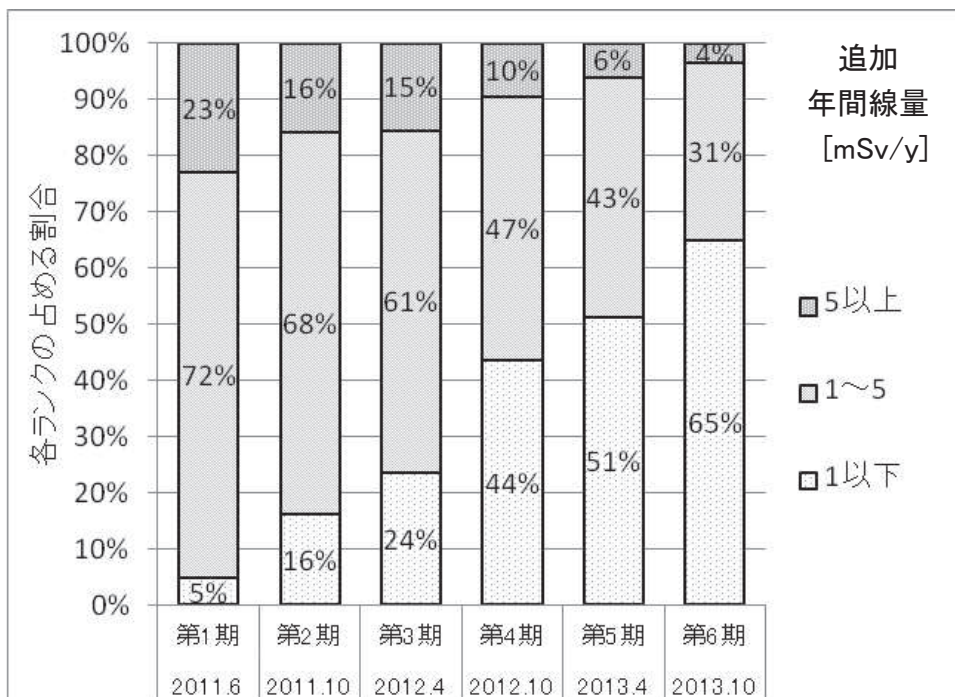
10月、第6期の空間線量率の測定が行われました。測定したブロックは数ブロックを除き、前回4月の第5期と同じです(測定ブロック数は967ブロック)。

【図1】に各地区の平均空間線量率[$\mu\text{Sv/h}$]の推移を示しました。各地区とも、引き続き同じような割合で空間線量率が下がってきています。依然、物理的半減期の約2倍の速さで下がっています。理由はまだ定かではありませんが、季節によらず同じように下がってきていることから、雨風といった環境条件ではなく、また、各地区とも同じような割合で下がってきていること、加えて、今回図を載せることはできませんでしたが、**山側から海側に向かって放物線状に放射線量率が低くなる傾向は変わらない**ことから、山・川・海・市街地・農地などといった地勢的条件からでもなく、何か別の空間線量率が物理的半減期よりも早く下がる共通のメカニズムがあると思われます。



【図1】各地区平均空間線量率の推移

【図2】には、各ブロックの追加年間線量(測定した空間線量率[$\mu\text{Sv/h}$]から1年間で自然放射線にプラスしてどの程度の放射線量を浴びるかを計算で求めたもの)を、1mSv/y以下、1~5mSv/y、5mSv/y以上の3ランクに分けて、それぞれのランクの占める割合の推移を示しました(南相馬市分のみ)。



【図2】追加年間線量レベルの推移

引き続き空間線量率が下がってきていることから、前回第5期よりも、さらに1mSv/y以下(ICRP 勧告値)のブロックが増えて、約3分の2を占めるまでになりました。チェル救のホームページでマップを見ることができますが、全体が線量の低いことを示す青色で覆われていることを確認できます。

マップでは確認できませんが、特に海に近い地域では、自然放射線量の値に近づいてきたところも出てきています。空間線量率が低くなった地域では、今後は、土中の放射性物質がどの程度残っているかを確認していく必要があると思われます。

スタディツアーに参加して

(小林 友子)

9月、チェルノブイリ救援中部のスタディツアーで、ウクライナに行ってきた。

1986年4月26日から27年経ったチェルノブイリの現状を、この目で見て、「平成28年4月に避難区域解除予定」の小高に生きると決めた私が、どの様に暮らしていけば良いのか知りたかったので。そして、ウクライナの人々の募金で買っていただいた「放射能測定器150台」への感謝のプレゼントとして、小高商工会女性部の手作りストラップ“駒130個”を、各訪問先の施設に手渡して来ました。お返しに、シトール25番学校とアートセローの子ども達から、絵をいただきました。今、「おだかふれあい広場」と小高区役所に飾ってあります。

今のフクシマの現状とチェルノブイリとの大きな違いは、被曝した人たち、特に子ども達の健康管理体制と配慮、それから放射能の管理体制でした。ウクライナでは、被曝手帳のような「チェルノブイリカード」があります。私達にはありません。チェルノブイリの子ども達には「長期保養」が国の施設で義務付けられています。フクシマは、一部ボランティア団体の好意で実施されていますが、行けない子ども達が多いのも現状です。小高駅前通り、海沿いの空間放射線量は0.1~0.3 μ Sv/hですが、他の所では1を超える所もあるのに、安全と言われ帰されるのです。チェルノブイリでは、30キロ圏内は今も立ち入り禁止区域です。10キロ圏のゲートでは、ホールボディカウンターで測定する事が義務付けられています。作業車も必ずスクリーニングして、30キロのゲートを通過します（もちろん見学車も）。私達のフクシマも、これから何十年も空気・水・土・食べ物、人の健康を見続けなければいけないのです。まだ終わってない現実をしっかりと捉えないと、後の世代に悔いを残す事になると思います。原発の廃炉作業が続くチェルノブイリのあるウクライナでは、皆が今も忘れないようにと、事故当時活躍した消防士の方々の博物館、廃村になった村に記念のモニュメント、すべての記憶が詰まったチェルノブイリ博物館があります。今も忘れないように、そして若者達が素晴らしい声で、鎮魂歌を博物館いっぱい響かせていました。これからのフクシマ・日本は、この原発事故を忘れず、もう故郷がなくなることをしないようにできるだろうか。幸せになりますように！



<ナロジチ地区行政庁にて

(2013年9月12日)>

ちょっと昔を見直す

8月末の日曜日、「自然エネルギーで暮らしをつくる」と銘打った巡検の案内役を引き受けた。半日かけて、バイオガス・バイオディーゼル燃料・小水力・太陽光発電など、仲間とともに伊那で二十年近く取り組んだ成果を見てもらった。再生可能エネルギーとか新エネルギーと言われ、いかにも最先端といった印象があるが、自然エネルギーはローテクの組み合わせで過去の経験を生かすことも大切だ。その代表が五右衛門風呂だろう。半世紀前の農村では当たり前だったが、今はほとんど消えてしまった。しかし、その魅力は他に代えがたい。まさに、**周回遅れのトップランナー**だと思っている。我が家では16年前、太陽光発電を導入した。そのきっかけも、当時頻りに伊那に来て助言いただいた桜井さん(エコテック)の「**60年代初めまで農村ではエネルギーを完全に自給していた**」という指摘から。子どもの頃の記憶が呼び戻され、やろうと思えばできるぞとの確信が湧き上がったのだ。

今から百年前、伊那谷では最初の電化の波(電燈事業・伊那電=飯田線の敷設)が押し寄せてきていた。その推進力となったのが、天竜川の支流に造られた村営水力発電所だった。一方、電力資本も進出し対立も生じた(赤穂騒擾事件1913・「百年の燈火」展望社 参照)。**電気事業は私たち庶民には手が届かないものと思われがちだが、創業期には地域住民によるエネルギーの地産地消が試みられていたのだ。それはまた、これからの方向を指し示しているのではないかと思う。**

10月末、エネルギーシフトをテーマとした学習会があったが、共通項は「省エネ」。先日の新聞記事によると、昨年の中部電力発電量は、バブル時代の1.3倍。もちろん原発抜きで。ちょっと昔を見直すことで、発電量は減らせるのではないだろうか。

(伊那市 小牧)

福島の痛みを忘れないために

先の衆議院選挙で自民党が圧勝して以来、政府の原発政策は大きく変化した。民主党政権が曲がりなりにも打ち出していた脱原発は、今、故意に忘れ去られ、再び原発推進のための原子力村が息を吹き返しつつある。しかし、福島第一原発の現状は、全く展望が見えないままである。歴史的には、過去の技術となりつつある原子力に固執することは、未来に逆行することでしかない。今ほど、国民の意識と政治が遊離している時代はない。フクシマを忘れず、福島の痛みを共有して、新たな時代の扉を開くために闘おう。

福島原発の今と原発のこれから

4号機の燃料プールの燃料が引上げられ始めたとはいえ、これは通常の定期点検で行われていた作業であり、大きな一歩ではない。

メルトダウンやメルトスルーした1号~3号の状態は全く不明のまま、今も毎時20トンもの冷却水を注入し続けなければならない理由も明らかでない。まして汚染水処理も進まず、被曝労働だけが過酷になっている。

労働者不足は東電自身が認めており、今後ますます過酷な被曝にさらされる労働が待っている状況で、果して廃炉に向けた作業は進むのだろうか。膨大な量に及ぶと予想される放射性廃棄物の処理に至っては、全く目途が立たない。政治家の保身のための先送りだけが幅を利かせている。全ては未来世代へのつけに廻される。廃棄物処分場がないので廃炉に着手できない東海原発とは、一体何なのだ。これでは浜岡原発はじめ、全ての原発も廃炉不可能になる。これまで原発を推進してきた自治体や政治家・電力会社・原子力産業界・専門家集団は、今こそ責任をとらなければならない。極論すれば、彼らに燃料棒を引きとってもらうべきではないのか。現状のままでは、停止したままの原発を永遠に保存するしかなくなる。それでも「金が動きさえすれば良い」というのが彼らの本音かもしれない。「もんじゅ」が良い例である。全く動く見通しもないままに、一日5,900万円の維持費を浪費している。いつの日か核兵器を持つのを夢見て、技術だけは維持したい狙いもある、と聞く。佐藤栄作政権時代に、密かにその構想が練られたようだ。当然、秘密保護法の対象になろう。原発は、初めから不条理に満ちた技術であった。国民は騙されてきたのだ。

それでも諦めない

現在、全国のすべての原発が停止状態で、1970年に商業用原子炉の運転開始以来、初めての事態である。これは、福島原発事故による大きな犠牲の結果であり、その苦しみを今も受け続けている福島の人々を忘れてはならない。同時に、再び事故を起こさないために原発の再稼働を止め、新たなエネルギーの時代を切り開かなければならない。今、私たちは大きな転換点に立っている。矢継ぎ早に打ち出される際どい政策の争点化に、国民は振り回され、大きな問題もすぐに過去のテーマになってしまう。それが、自民党政治の意図的なやり方である。いつの日か、あの時こうしておけば良かった、と後悔する日が来ることはないように、今一歩を踏み出そう。

原発は過去の技術であることを確信し、未来を構想しよう。短期的には敗北することも多々ある。しかし、「人間は信じるに足る存在である」ことを歴史は示している。いつの日か地球上から核が消える日を夢見て、明日を迎えよう。

チェルノブイリと福島から未来を

人類は災難や失敗から多くを学び、未来に生かし、歴史を作ってきた。過去に、一部の政治家や支配者が自らの利益のために戦争を起こし、社会に破滅をもたらしたとしても、人々はそこから新たな社会制度や技術を編み出し、社会に生きる希望を作ってきた。「衆愚は天に通ず」、これは足尾銅山の公害反対に生涯をかけた田中正造の言葉である。彼は人々を信じ、敗北もまた未来への一里塚だと考えていた。普遍的な価値の追求こそが未来を作ると信じて、また明日を生きよう。(河田)

<事故収束作業者の心の叫び>

去る10月27日(日)、東海ネット主催の講演会「被曝労働の実態」において、福島原発事故『収束作業』である北島教行さんが、参加者に問いかけた。

「原発反対を訴える皆さんは、私達と一緒に『収束作業』をする覚悟がありますか？」

「劣悪な環境下で、『収束作業』に耐え切れず、いつストライキが起きても不思議ではありません。皆さんは、そのスト（職場放棄）を支持しますか？」

「現場から遠く離れた都会に住む皆さんが、『事故処理を急げ!』と叫ぶたびに、私達は死と隣り合わせの絶望の淵に追いやられるのです。」…と。

今、改めて「反核」「脱原発」運動のあり方が問われている。(J)



北島教行です。

- * 原子力発電によって生み出された電力を使ってきたのは、一体どのような人々でしょうか。果たして首都圏工業地帯の大企業だけでしょうか。
- * 「原子力発電に頼ってきたことを知らなかったから」といって、免罪されるのでしょうか。
- * 「反原発運動に関わっているから」といって、免罪されるのでしょうか。
- * 「原子力マフィアが勝手に原子力に依存するように仕向けてきたから、これまでの消費者に罪はない」と言い逃れするのでしょうか。
- * 「首都圏に子どもはたくさんいるのだから、汚染土は受け入れない」というのは一見正しい。だけど、「原発立地周辺域の土地で暮らす子ども達は、数が少ないから考慮しなくていい」とでも考えるのでしょうか。
- * 「福島県の子供も達だけでも強制的に疎開させる運動」に従事すれば、免罪されるのでしょうか。
- * 反原発の集会やデモに参加すれば、すべてが免罪されるのでしょうか。
- * 今後、首都圏での高線量被曝者が、清掃労働者・水道労働者になるという事実を知っておられるのでしょうか。
- * 「過疎地域住民なら人数も少ないから、被曝のリスクが増大しても構わない」とお考えでしょうか。
- * 「東北地域を放射能で汚染させた主犯は、東電・政府・原子力マフィア」…それは正しい。だがその主犯たちに罪を押し付けるだけでいいのでしょうか。首都圏住民も共犯者としての責任はないのでしょうか。私達に一切の罪はないのでしょうか。
- * 「子ども達のため」という「魔法の言葉」を持ち出せば、共犯的關係性を問われることなく免罪されるのでしょうか。隠れ蓑にしているのではないのでしょうか。
- * 『収束作業』は政府や東電が行っているのではなく、原発労働者が作業している」ということが分かっているのでしょうか。
- * 「誰かが『収束作業』に従事してくれているから、私たちは気に留めることもない」と考えていやしないのでしょうか。「自動的に『収束作業』が進む」と考えてはいないのでしょうか。
- * 「原発労働者のほとんどが立地周辺地域住民である」ということをご存知でしょうか。
- * 「危険な労働は、寄せ場労働者や在日外国人、強制連行した海外の労働者によって担われてきた」ということをご存知でしょうか。
- * 「原発のお金でいい思いをしてきたのは原発周辺地域でしょう」などと、原発を押し付けた側は思っていないのでしょうか。
- * これから廃炉に向けて作業するのは誰なのでしょうか。
- * これらの問い掛けは、首都圏住民運動への問いかけというよりも、当然わたし自身への問いかけでもあり、免罪され得ない主体であるとの認識を新たに確認する作業でもあります。

あなたも倫理的な点検作業をはじめてみませんか。

特定非営利活動に係る事業会計 活動計算書 2013年度中間報告

特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部

(単位：円)

自 2013年 4月 1日 至 2013年 9月 30日

科目		金額	
【経常収益】			
1. 受取会費	正会員受取会費	81,000	
	賛助会員受取会費	228,000	309,000
2. 受取寄付金	ミルク	62,500	
	被災者支援	26,000	
	菜の花プロジェクト	14,000	
	福島原発被災支援	198,150	
	一般寄付	3,198,833	
	福島・菜の花プロジェクト	27,650	3,527,133
3. 受取助成金	日本郵便(株)年賀寄付金	3,214,000	
	宗教法人真如苑	1,625,000	4,839,000
4. 事業収益	福島支援事業	493,000	
	イベント関連事業	24,260	
	啓発事業	151,150	668,410
5. その他の収益	受取利息	1,161	
	雑収益	33,750	34,911
経常収益 計			9,378,454
【経常費用】			
1. 事業費			
(1) 人件費	給料手当・日当	576,000	576,000
(2) その他経費	業務委託費	1,049,551	
	支援金	1,261,845	
	印刷製本費	1,026,767	
	諸謝金	20,000	
	会議費	90,505	
	旅費交通費	1,623,618	
	通信費	39,948	
	荷造運搬	188,400	
	消耗品費	8,420	
	地代家賃	570,000	
	水道光熱費	55,117	
	賃借料	30,500	
	新聞図書費	78,880	
	支払手数料	13,430	
	雑費	69,640	
	為替差損	281	6,126,902
事業費 計			6,702,902
2. 管理費			
(1) 人件費	給料手当	915,650	915,650
(2) その他経費	通信費	62,675	
	荷造運賃	32,025	
	旅費交通費	27,960	
	会議費	150	
	消耗品費	137,671	
	修繕費	21,766	
	地代家賃	300,000	
	租税公課	50	
	支払手数料	17,830	
	雑費	5,250	605,377
管理費 計			1,521,027
経常費用 計			8,223,929
経常収支差額			1,154,525
【その他資金収支】			
当期収支差額			1,154,525
前期繰越収支差額			14,736,041
次期繰越収支差額			15,890,566

【活動計算書の注記】

今年度はその他の事業を実施していません。

財務諸表の注記

1. 重要な会計方針

計算書類の作成は、NPO法人会計基準(2010年7月20日 2011年11月20日一部改正 NPO法人会計基準協議会)によっています。

- (1) 固定資産の減価償却の方法
有形固定資産は、法人税法の規定に基づいて定率法で償却をしています。
- (2) 消費税等の会計処理
消費税等の会計処理は、税込経理方式によっています。

2. 事業費の内訳

事業費の区分は以下の通りです。

科目	医療 機関 支援 事業	粉 ミ ル ク 支 援 事 業	被 災 者 団 体 支 援 事 業	ク リ ス マ ス カ ー ド 事 業	ナ ロ ジ チ 再 生 プ ロ ジ ェ ク ト	業 務 委 託 事 業	通 信 誌 発 行 事 業	イ ベ ン ト 関 連 事 業	派 遣 事 業	福 島 原 発 被 災 支 援 事 業	啓 発 事 業
【経常収益】											
受取寄付金		62,500	26,000		14,000			200,000		225,800	
受取助成金										4,639,000	
事業収益								24,260		493,000	151,150
その他の収益								7,650		6,900	
経常収益 計	-	62,500	26,000	-	14,000	-	-	231,910	-	5,364,700	151,150
【事業費】											
(1)人件費											
給料手当・日当					100,000				200,000	276,000	
人件費計	-	-	-	-	100,000	-	-	-	200,000	276,000	-
(2)その他経費											
業務委託費					37,464	250,087				762,000	
支援金										1,261,845	
印刷製本費					147,350		117,810			761,607	
諸謝金								20,000			
会議費								33,255		57,250	
旅費交通費								86,180	286,900	1,250,538	
通信費							36,828			3,120	
荷造運搬費							186,080			2,320	
消耗品費				1,650						6,770	
地代家賃										570,000	
水道光熱費										55,117	
貸借料								30,500			
新聞図書費											78,880
支払手数料		1,080	501		300			420	420	10,709	
雑費										69,640	
為替差損					140	141					
その他経費計	-	1,080	501	1,650	185,254	250,228	340,718	170,355	287,320	4,810,916	78,880
事業費計	-	1,080	501	1,650	285,254	250,228	340,718	170,355	487,320	5,086,916	78,880
経常収益-事業費	-	61,420	25,499	-1,650	-271,254	-250,228	-340,718	61,555	-487,320	277,784	72,270

第15期上半期(2013年4月1日～同年9月30日)の会計報告を監査した結果、異状なく正当に処理されていることを証明します。

平成 25年 11月 15日 監査人 神野 美知江

2013年度上半期は、経常費用が822.3万円に対し、収益が937.8万円と、プラス115.4万円の収支差額が発生しています。しかし、本来上半期に行うべきチェルノブイリへの支援金送付が、「ウクライナ国内での人道支援に対する手続きの大幅な変更」による影響で、実施できないままとなっています。上半期に実行できなかった支援金は、ナロジチ病院への支援金85万円・被災者3団体への支援金(上半期分)55万円・粉ミルク支援金の39.4万円です。このため、本来ならば64万円マイナスになるはずですが、115.4万円のプラスになっています。実行できていない支援金179.4万円は、現地での体制が整い次第、すぐに送金する予定です。

そのほかの事業については、問題なくほぼ予算通りに実行されています。管理費についても予算通りの支出となっています。寄付金は、予算目標の50%が集まり順調といえます。内訳としては、指定なしの一般寄付がその90%を占めており、次に福島支援に対する寄付(福島原発被災支援および福島・菜の花プロジェクト)6%、チェルノブイリ支援に対する寄付(ミルク寄付、被災者支援および菜の花プロジェクト)が2%となっています。指定寄付はそれぞれの活動資金として、指定なしの寄付は全体の活動資金および管理運営費に充てられます。

皆様のご支援、本当にありがとうございます。下半期にはチェルノブイリへの支援金の送付やコンバインキャンペーンなどで大きく資金が動きます。今後とも皆様からの温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。(会計係 兼松)

事務局便り

今年もあとわずかというこの時、なんという由々しき危うい事態が進行していることか。特定秘密保護法案の議論なき法案通過を目論む政府、柏崎刈羽再稼働策動、原発輸出促進政策、東電福島第一原発4号炉の「想定外」想定せずの使用済み核燃料移送作業。この国の危機的状況が進行していく。2013年晩秋は、鬱々とした思いと怒りが交錯し、愛でべき紅葉が虚ろに散る…。チェル救は、名古屋NGOセンターの呼びかけで「秘密保護法を制定しないことを求める国際NGOの要請書」に賛同した。要請書は、呼びかけたNGOによって政府に提出された。詳しくは、チェル救ホームページをご覧ください。さて、恒例のカードキャンペーンは、研修生・諏訪さんがしっかり担って、順調に進捗。ホステージ基金では、ドンチェヴァさんがウクライナ行政の官僚的対応に、未だ苦戦している。被災者3団体と共同陳情書を提出するも、クレームのラッシュ。しかし、何とかこの事態を突破しなければならないとの一念で、粘り強く格闘！している。一方、南相馬では「菜の花プロジェクト」展開のために一歩踏み込み、各グループが一緒になって協議会設立へ向けての努力を重ねている。コンバインカンパも、ありがたいことに168万円を超えた。今年も、皆さまから多くのご支援をいただいた。心から感謝申し上げます。(山盛)

「知ってください(改訂版)」の紹介

皆さまご存じの「知ってください」が新しく「知ってください福島そしてチェルノブイリ」とタイトルを変え、第6版が完成しました。

今回は、チェルノブイリ原発の第2石棺(4号炉ドーム)や福島県南相馬市での活動を紹介します。手に取ってご覧になりたい方は、事務局までご連絡くださいね。

編集後記

☆東北の歴史を私たちはほとんど教科書で学んでいない。京都・奈良中心の歴史ばかりに目を向け、辺境の地としての扱い。その理由は？ 続きは12月1日のフクシマ講座で…。(佳)

☆たくさんの方のボランティアのおかげで、今月末に6枚目が完成する放射能線量率マップ。参加した方の中から「我が町でも測定を」という声が上がった。資金あつての3年間。感謝感謝。(美)

☆秋晴れの青い空を、いく筋もの飛行機雲が交錯する。それは、やがて薄くたなびき、全天を灰色におおいつくす。人工の飛行機雲「ケムトレイル」である。これは、「ジオ・エンジニアリング(人工的な気象操作)」と呼ばれ、「地球温暖化防止」のために雲を作る実験なのだという。「異常気象」は、その成果の一つなのであろう。雲の成分は、アルミニウム・バリウムなどの酸化物。もちろん、人体にも植物にも有害物質である。悪名高い、遺伝子組換作物を作る「モンサント社」は今、「アルミ耐性農作物」の特許取得に余念がない。「ケムトレイル」は、今日も日本全国に撒き散らされている。空を見上げ、しばし立ち止まって、「TPP」や「秘密保護法」へとつながる「詐欺」の連鎖に気付いていただきたい。(J)



〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14
印刷「エープリント」
TEL・FAX (052) 871-9473